

# デュアリズムからの脱却の可能性

## ——エスニック階層論の展開——

樽本 英樹

1980年代以降の先進社会は、近代化論の予想を裏切りデュアリズムの様相を示しており、エスニックな労働力の受け入れはデュアリズム的政策の有力なもの1つであるとされてきた。しかし、エスニックな人々は、いくつかの条件の下ではデュアリズム的社会構成から脱却する可能性がある。本稿では、アメリカ合州国を事例として、逗留といった滞在形式や既存のエスニック・ネットワークの強さが経済的動機の形成や資源の準備を促進し、エスニック・マイノリティを社会階層の中層や上層へと上昇移動を可能にすることを示す。最後に、デュアリズムとマイノリティ上昇移動との関係を考察し、今後の課題を検討する。

### 0. 問題の所在：「収斂」の終焉か

かつて近代化論は、工業化によって諸社会の内に包含される諸制度が同一のものへと「収斂」していくと論じた。「収斂」の目標は、「多元主義的インダストリアリズム」という自由主義的モデルである。工業化は、諸個人が合法的な手段を用いて自らの利益を追求する自由と、利益追求のために組織をつくるという自由を促進する。その結果諸社会では、諸利益を主張する諸集団が多数できあがり、社会的不平等の減少が実現されるというわけである<sup>(1)</sup>。しかし、1980年代以後近代化論に同調する者は少なくなった。先進社会を見ると、「収斂」よりもむしろ「拡散」の傾向を示していると言われるようになったのである。スタグフレーションの時代を迎えた1980年代半ばの時点では、「拡散」の状況は、一方でマクロな政治的意思決定においてコーポラティズムへと向かう傾向として、他方

では資本主義経済においてデュアリズムへと向かう傾向として語られていた（Goldthorpe 1984）。

しかし、1990年代半ばである今、各先進社会は「拡散」ではなくむしろ「混沌」の様相を示している。例えば経済的イシューに関する政治的意思決定については、企業レベルでの産業セクター別交渉とマクロ・レベルでの経済調整メカニズムが結びついた「新たな収斂」の可能性が残るものの、マクロ・レベルでの「ネオ・コーポラティズム」という単一モデルは当てはまらなくなっている（稲上他 1994）。コーポラティズムというモデルの消滅は「混沌」へと先進社会を導いている。

一方、デュアリズム的な対応策の中で特に移民労働力導入に関しては、石油ショック以後の流入の増加を経て、その後の不況期に入ってもかなりの国際的移動が見られる。各国政府による対応は一様ではないものの、先進諸国は概ね受け入れ国の役割を担っている（大塚 1993）。

それでは、先進諸国はデュアリズムへと「収斂」していくのであろうか。否、移民労働力の導入をデュアリズムへの新たな「収斂」とだけ規定することはできないのではないか。確かに短期的に見れば「柔軟な労働力の確保」という観点から移民労働者の受け入れは進んでいくであろう。一方で、中長期的視角からは、移民労働者の経済的成功に注目しなくてはならない。確かに、ある社会のある移民労働者たちは定着後もデュアリズムの「下層労働」を担っていくであろう。しかし、他の社会のある移民労働者はホスト社会内で職業的に上昇移動を達成するであろう。つまり、今後の経済的な社会変動の方向性はデュアリズムへ向かうとは限らないのであり、「混沌」としている。

先進社会におけるエスニシティ研究は、以上のような工業化の進展に伴う社会変動の「混沌」とした方向性をエスニシティという限定された視角から明確化することに寄与するであろう。アプローチの仕方には2つが考えられる。

第1に、コーポラティズムを初めとした政治的制度と、エスニックな人々との相互作用に注目する政治的アプローチである。一般に、コーポラティズムは社会的利益が職能別に分布していることを前提とした政治的制度として概念化される。一方で、エスニックな人々の利益はエスニックな紐帯に沿って分布している可能性がある。この点でコーポラティズム的利益分布とエスニシティ的利益分布は独立でありうる。したがって、エスニシティという観点から、コーポラティズムとは別の政治的意思決定制度の新たな「収斂」、新たな「拡散」、新たな「混沌」を発見する可能性に開かれる。またより重要なのは、コーポラティズム等の政治的制度の基礎となっている国民国家 (nation-state) という政治的枠組みがエスニシティの覚醒によって揺る

がされているという事実である。民族 (nation) という文化制度と国家 (state) という政治制度の一致という「虚構」が脆弱になると共に、職業別に解釈されてきた社会的利益はエスニシティ別に解釈されていく。各国政府の多文化主義的政策はエスニシティ別の社会的利益の形成を促進するものである。これらの点に、政治的な社会変動の「収斂」「拡散」「混沌」の姿が現れる。

第2に、デュアリズムに対してエスニックな人々が与える影響に注目する経済的アプローチである。近代化論によると、エスニックな相違は工業化によって消し去られることになる。他方でデュアリズム的予想によれば移民はホスト社会の「底辺労働」を支えることになる。実際に、移民労働者はどの程度まで経済的に「底辺労働」を支えているのか。「底辺労働」から抜け出す可能性はないのか。どのような条件の下で階層上昇移動が可能になるのか。これらの問いは、「収斂」「拡散」「混沌」といった経済的変動の方向性についての解答を与えてくれることであろう。特にエスニシティに注目した場合、これらの問いにはエスニック階層論という形式で接近することができる。

本稿では、アメリカ合州国での事例を中心にいくつかの変数を固定し、理論化を行うことに重点をおいて、第2の課題であるエスニシティとデュアリズムの関係を論じていくことにする。

## 1. デュアリズムとは何か

本筋の議論に入る前に、最も重要な概念に検討を加えておこう。デュアリズムという概念はいったい何を指示しているのであろうか。一般にデュアリズムとは、ある社会の経済システム

の中に分断線が形成されて不連続で異質な2つの部分 (segments) が構成されている状態を指す。このとき、2つの点が問題となる。第1に2部分を構成する単位は何かということ。第2に2部分の関係はどのようなものかということである。

前者の単位の問題に関しては、3つの場合を区別することができる (Berger and Piore 1980: 55)。

第1に単位を企業とする場合である。大規模で寡占的な企業と小規模で競争的な企業が経済内に「共存する」状態をデュアリズム概念で表す。例えば、戦前の日本の花形産業であった繊維工業はデュアリズムを形成していたとされる。このデュアリズムは、生産設備量にして10倍以上の格差をはらんだ大規模企業群と中小規模企業群が賃金格差を形成しながら存続していたという意味である (尾高 1989: 158-73)。第2に経済的關係を単位にして2つの経済セクターに区分する場合である。諸行為者間の経済關係が近代的で組織的な様相を帯びる場合と、伝統的でインフォーマルな様相を帯びる場合が区別される。植民地経済における工業セクターと在来産業セクターとの並存の分析や、工業セクター内における伝統的な取り引き慣行の残存といった問題意識はこの経済セクターを分断するようなデュアリズムに注目している (Dore 1973, 1983, Geertz 1978)。第3に仕事口を単位として労働市場が分断される場合である。上層を1次的労働市場、下層を2次的労働市場と呼ぶ。一般に、専門職・管理職や高所得で安定した一部のブルーカラーが属する労働市場を1次的、不安定で低所得の職業が属する労働市場を2次的と措定することが多い。また、各労働市場間に移動障壁が存在するとされる。このような労働市場の上層と下層の分化は、同一職種に

においても問題にされるであろう。つまり、ある職種に関してそこに従事している労働力の属性等で賃金や生産性に差異があるとき、その同一職種に属する仕事口には上層に位置するものと下層に位置するものがありうる。

以上の3タイプは相互に関連しながらも区別される現象である。大企業なのに生産性が低く労働集約的な企業は伝統的なのか、といった疑問 (Berger and Piore 1980: 91) は、第1の企業間デュアリズムを前提にしたにもかかわらず、企業間デュアリズムの上層の内部に第2の意味での経済セクター間デュアリズムが観察されてしまう、という「矛盾」である。しかし、デュアリズムを3タイプに類別した立場からは「矛盾」している両者は理論的には別の現象と確認できる。また、「外国から移植された技術 (生産技術、生産管理、および製品デザイン) を中心にすえた大規模で官僚制的・合理的組織にもとづく資本主義的経営と、在来技術を基盤にした中小規模の家族共同体的経営とが共存する状態をさす」 (尾高 1989: 134) といった日本経済に関するデュアリズムの定義は、経済セクター間デュアリズムの特色を踏まえながらも企業間デュアリズムの観点から現象を読み込もうとしている。

本稿では第3の意味での労働市場的デュアリズムに注目することが適当であろう。その理由は以下のようなになる。我々の目的は「先進社会における移民労働力導入がデュアリズム的対応である」という従来からの見解に検討を促すことである。このために、移民の職業移動という観点を採用する。職業移動の観点から従来の仮説は、「果たして移民労働力は、労働市場をデュアリズム的構造へと整形したり、その構造を維持するのに寄与するような仕事口につくのであろうか」という問いに転換されることになる。

そこで労働市場的デュアリズムに注目するのである。

第2に、デュアリズムの2部分の関係にはどのようなものが想定されるのであろうか。部分間関係は、無縁-併立型、互助-傾斜結合型、支配-垂直結合型の3タイプが想定可能であろう。無縁-併立型は2部分間にほとんど内在的関係がない場合である。互助-傾斜結合型は、相互信頼に基づいた水平的で双務的な関係を指示している。最後の支配-垂直結合型は、各種の社会的資源・機会配分に関して画然とした格差が2部分間に存在することが含意されている。日本の労働社会においては、企業間の元請け-下請け関係や大企業内部での長期雇用慣行の中に互助-傾斜結合型が見られるとされる。一方で、町工場の経営者の主観の中では支配-垂直型が見られることが多いとも言われる（稲上 1989: 244-7）。

本稿では、デュアリズムが基本的に支配-垂直結合型であると把握して考察を進めていくことにする。その理由は、第1に、先進社会を対象とした「収斂の終焉」論が想定していたデュアリズムが「1次的」労働力と「2次的」労働力の分化にあったからである。この意味は、賃金や労働条件、仕事の安定性等が法律、労働協約や労働慣行、労働組合等によって保護されているといった労働力の商品化の程度だけを指していたのではない。その商品化の程度が、市場の力や経営者・管理者の専権に曝される程度の労働者間での差異と関連していることを問題にしていたのである（Goldthorpe 1984: 24-32）。つまり、「恵まれた」労働力と「恵まれない」労働力という社会的資源分配・機会配分の観点での「垂直」方向への分化に注意を払っており、その問題意識を本稿でも共有する必要がある。第2に、移民労働力を初めとするエスニック・

マイノリティは従属的地位につく傾向にあると言われる。このことは、仕事口のデュアリズムが支配-垂直結合型に形成されており、その「下層」部分にマイノリティが参入していくことを問題にしているのである。このようなエスニシティ論の問題設定こそが、デュアリズムとエスニシティ論の接点なのである。

以上のように、本稿でいうデュアリズムは支配-垂直結合型に構成された様々な仕事口の2部分の並存状態のことである。それでは、いったいデュアリズムと移民との関係はどのようになっているのであろうか<sup>(2)</sup>。

## 2. マイノリティ労働力のデュアリズム的仮説

移民として他国へと渡ってきたマイノリティたちの基本的なイメージは「貧困」である。移民は、ゲッターのようなところに集まって住み、麻薬が蔓延し、臨時就労や単純作業等の収入の低い職業にしかつことができず、著しく低い水準で生活せざるをえない等々。例えば、合州国における所得階層を考えたとき、五分位の家族所得の最下層と最上層との平均値の差異は1990年現在 9.6倍の開きがある。最下層である下位 20%の家族所得の上限値は 16846ドルであり、所得を全部足し合わせても全体の 4.6%にしかならない（U.S. Bureau of the Census 1992）。移民たちはこの最下層を占めているとイメージされるのである。経済的状况に関する我々の「貧困」イメージは、いくつかのマイノリティの状況と合致しているように見える。家族所得の平均が五分位の最下層の上限値以下であるマイノリティには、メキシコ系、黒人系、ヴェトナム系、プエルトリコ系等が挙げられる（U.S. Bureau of the Census 1992, Portes and Zhou 1992:

496)。

このとき、これらいくつかのマイノリティはデュアリズムの下層を形成していると考えられる。つまり、エスニック集団ごとに分割労働市場 (split labor market) が形成されているのである。第1に、ホスト社会の主流労働者がつくことのできる職種と移民等のマイノリティが雇用される職種が区別されているという点で、基本的には労働市場は分割されている。前者が高技能・好条件の仕事口であるのに対して、後者は臨時就労や単純作業の仕事口である。この場合は二重労働市場 (式部 1992) と呼ばれることもある。一方で、第2に「場所の重なり (niche overlap)」が生じる場合もある。同じ職種についてとしても白人を中心とした主流労働力の価格と、マイノリティ労働力の価格に差異が形成される。労働力の価格差には2つの含意がある。経済的には労働力の価格は賃金で測られる。労働市場は賃金の高い高給労働と賃金の安い低給労働の2層で構成される。雇用主としては、賃金の安い労働力を利用した方が生産コストを削減できる。しかも、経済的効率性を維持し上昇させるという観点からは、賃金だけが重要な要因ではない。労働組合を通じて様々な要求のためにストライキをうたれることは、雇用主にとって大きなコストになる。したがって、スト破りを行うために従順なマイノリティ労働者を主流労働者の代わりに雇用し、「配置換え (displacement)」を行うのである。このとき、マイノリティ労働者は「政治的価格」で評価されていることになる<sup>3)</sup>。

以上を踏まえると、エスニック・マイノリティとデュアリズムとの関係が明確になる。マイノリティ労働者のデュアリズム的仮説は、「いくつかのマイノリティは分割労働市場の下層労働を経由して、社会階層の下層に位置してしま

い、そこから逃れられない」と主張する。ではなぜ下層から逃れられなくなるのであろうか。

第1に、マイノリティは人種的に劣っているという説明がある。この人種主義説は遺伝決定論を背景にして繰り返して現れてくる<sup>4)</sup>。しかし、日常生活者の用いる世界の説明図式・論理を1次理論と呼ぶならば、1次理論の枠組みを超えるものではないであろう。

第2に、ある文化の所持がマイノリティを下層に位置づけるという説明がある。文化的決定論は、近代化が均質に進展するのではなく、地域的には不均等に発展するしかないと主張する。その理由は中央の中心的文化と地方の周辺の文化的差異である。経済活動の主導者は中心的文化の保持者から採用され、経済活動の主要決定は中心的文化の下でそれを有利にするように行われる。その結果、周辺の文化的保持者は低レベルのサービスや生活水準に甘んじなくてはならない。こうして文化的分業が成立するのである (Hechter 1975)。マイノリティは上昇志向を捨てて挫折感を抑え、労働や儉約以外の事柄に喜びを見いだすという「貧困の文化」を採用していく (Lewis 1966=1971)。この結果、マイノリティの経済的不遇と「貧困の文化」の間に悪循環が形成されるのである。

このような文化的決定論は、近代化論を背景とした同化主義的説明に対するアンチテーゼであると多く解釈されている。工業化の影響があろうとも、マイノリティは簡単にはホスト社会の文化を身につけるわけではないのだから上層移動できないのだと。しかし同化主義的説明の内容は、マイノリティの社会移動に関しては、マイノリティが経済的成功をおさめるためにはホスト社会の価値を内面化することが必要だという主張に解釈できる。すると、文化的決定論は同化主義的説明の裏返しであることがわか

る。つまり、文化的決定論に従えば、中核的文化を内面化さえすれば経済的に上昇移動できることになるのである。しかし、アメリカ的価値を習得しても経済的に成功できないという合州国の黒人等の例が報告されている (Portes and Zhou 1992: 493)。

第3に、文化決定論と類似しつつも立場を異にした説明として、エスニック・ネットワークに組み込まれていることがマイノリティを下層に押し込めるのだとする説明がある。あるマイノリティには使用できる資源がほとんどない。財、機会、影響力等の資源を所持しないときに、マイノリティはどのように生活していくのか。エスニシティという「変更しがたい (primordial)」(と思われている) 属性を指標として仲間集団のネットワークを形成するのである。マイノリティ個人々人を結節点とするこのネットワークを活用することで、住居の決定から冠婚葬祭や病氣等に至るまでの世話を受けることができる。つまり、エスニック・ネットワークは生活するための「関係的資源」を供給するのである。しかし一方で、ネットワークに属しているがゆえに、互酬的關係、關係の機能的包括性、属性原理といった関係性から逃れられず経済的成功を逃げるできない場合が多いとされる。また、エスニック・ネットワークはエスニシティという属性を可視的なものにするため、中産階級からの差別を誘発するという (山本 1993)。

しかし、エスニック・ネットワークへの所属と経済的上昇が本質的にジレンマを抱えているか否かは、それぞれのネットワークの戦略の内容と状況に依存するのだと留保を付けることが必要である (山本 1993: 32)。したがって、マイノリティが下層に留まる理由を考察するためには、単にエスニック・ネットワークに所属す

るという事実だけではなく、当該ネットワークの質や環境を見ていくことが必要であろう。

日常生活者が世界の解釈に用いる理論を1次理論と呼び、研究者が用いる理論を2次理論と呼んでおこう。2次理論において、マイノリティが下層に滞留するという1つの「収斂」モデルが存在する。半導体産業のような高度な工業化が労働の二極分化を進めるという説 (Sassen 1988=1992) はこの「収斂」モデルを補強している。しかし、エスニック・マジョリティとエスニック・マイノリティが経済的にデュアリズム構造を形成する決定的な要因を発見することは現在のところまだかなり困難である。そこで、マイノリティが下層に滞留するというデュアリズム的仮説が否定されるとしたら、どのような現象がどのような論理の下に現れるのであろうか。すなわち、マイノリティが経済的上昇を達成するとしたら、どのような要因が必要なのか。このように考えることで、考察を一步進めよう。

### 3. 中層への上昇

ホスト社会の職業階層構造がデュアリズム的である場合、2層は高技能・高賃金の「専門・管理仕事口」や「熟練仕事口」と低技能・低賃金の「非熟練仕事口」で構成されている。前述した「デュアリズム的仮説」をエスニック・マイノリティが否定するとすれば、2層の中間的位置にある「中間的仕事口」へと上昇移動することがまずありうる<sup>(6)</sup>。「中間的仕事口」には、貿易・商業、労働請負人、賃料収集人、金貸し、仲介人等が想定される。これらの仕事口が「中間的」である理由は、第1に、雇用主と被雇用者、生産者と消費者を媒介する性格を帯びたものが多いということである。第2に、これらの仕事は小規模でありながらも自営業的な要素が

見られる。したがって、統制力と生産手段所有という2つの要因を用いた「階級区分」(Wright 1985)を念頭においても、「中間的」と判定できるであろう。「中間的仕事口」には、上層の仕事口ほどではないにしても、ある程度の規模の生産手段所有と、従業員や自己に対するある程度の統制力が備わっているのである。また、収入も「非熟練仕事口」よりも多く得られる。このような「中間的仕事口」についているマイノリティを「中間者マイノリティ(middleman minority)」と呼ぶことにする<sup>(6)</sup>。

エスニック・マイノリティはいかにして中間者マイノリティとなるのであろうか。下層に滞留するマイノリティと相違があるとすれば、どのような条件であらうか。まず、移民であれば十分な資源を既に所持していることは想定しにくい。したがって、ホスト社会で資源を調達するエスニック・ネットワークの存在が不可欠になる。ここでいうネットワークは、下層滞留するマイノリティが利用するような冠婚葬祭時の世話等の「関係的資源」だけでなく、物質的な財、仕事等の様々な機会、影響力といった狭い意味での諸資源を提供してくれるものである。第2に、そのような「強い」ネットワークを活用するためには、マイノリティがホスト社会内でマジョリティとは異なる独特の形式で滞在していることが必要となる。その形式での滞在を「逗留(sojourning)」と呼ぼう。逗留とは故国(homeland)または故国と想定される場に対して強いコミットメントを抱いたままホスト社会内で滞在することである。マイノリティは、そのようなコミットメントを通じて当該ネットワークを「小」故国のように意識し、ネットワーク内での便益を受けられるようになるのである。

さらに厳密に言うと、逗留には2形態が区別

される。第1に、ホスト社会に定住する計画なく一時滞在する一時的逗留である。第2に、故国へ帰国する計画がないままホスト社会に滞在する永住的逗留である<sup>(7)</sup>。しかし重要なことは、一時的であれ永住的であれ、2形態のどちらもが上昇移動して中間者マイノリティとなるために決定的な役割を担っているということである。すなわち、逗留はマイノリティに2つの意味で強い動機づけを形成するのである。第1に、ホスト社会の成員と競合しにくい「中間的な」仕事口を選択する動機を持つ。上で挙げたような「中間的な」仕事口は流動性が高く安定性に乏しいにもかかわらず選択されるのである。これに関連して、第2に経済的な強い動機を逗留しているマイノリティは持つ。「進取の気性(enterprise)」と「勤勉(industry)」といった労働倫理は、諸資源に関して既に劣っているマイノリティの経済的成功には不可欠である。これら2つの動機づけは、故国へのコミットメントが現在のつらい状態に耐えて喜びを先にのばすという「目的手段的態度」をマイノリティにとらせた結果可能になると考えられる。

合州国において、中間者マイノリティにはギリシャ人、日本人、中国人、韓国人が当てはまってきた。しかし、技術革新の結果最近急激に進んだ情報のパーソナル化とグローバル化は、「遠隔地ナショナリスト」のような形式で故国から遠く離れたホスト社会にいながらにして故国へのコミットメントを形成・維持しやすくなっている(Anderson 1992=1993)。マイノリティはホスト社会で逗留しやすくなってきたのである。その結果、逗留をするマイノリティは増加していくであろう。このとき、「マイノリティ労働力のデュアリズム的仮説」はますます支持しがたくなり、先進社会はデュアリズムへと「収斂」していくとは想定できなくなる。

#### 4. 上層への上昇

マイノリティがホスト社会の文化体系に同化することなく、職業階層の上層まで上昇することができるならば、デュアリズムへの「収斂」モデルはさらに支持しがたくなる。上層上昇の可能性はあるのだろうか。

まず、高賃金・高技能である「専門・管理仕事口」が上層に位置する職業であることを確認しておこう。ただし、その中に規模の大きな自営業の経営者が含まれていることに注意しなくてはならない。エスニック・マイノリティが成功する (make it) 1つの重要な道が、自分や親等親族が起こした商売を大きくするということだからである<sup>(8)</sup>。上層の仕事口につくためにはいくつかの条件が必要である。

第1に、上層の仕事口、特に「専門・管理仕事口」につくためには、マイノリティは知識を中心とした人的資本を持っていないとしない。しかしマイノリティは、人的資本取得の動機づけを持っていたとしてもホスト社会の正規の教育システムを利用しにくい傾向にある。第2に、人的資本を身につける過程、また自営業を起こしたり運営していく過程において資金をはじめとしたかなりの物的資本が必要である。第3に、マイノリティが人的資本を持っているにもかかわらずそれに見合わない職業にしかつけない場合が多い。1975年から1979年に合州国へ入国した移民の27%は出身国で専門職と管理職についており、合州国全体の平均を超えている (Portes and Rumbaut 1990: 57-8)。この事実を考えると、人的資本と仕事口とのマッチング問題はマイノリティにとって深刻なものである。マッチング問題が生じる理由は、ホスト社会の日常言語の難しさ、ホスト社会で職探しを

した経験の欠如、職情報の欠如等が考えられる (Portes and Rumbaut 1990: 84)。このマッチング問題を乗り越える仕組みが必要となろう。

これらの条件をマイノリティに対して満たす制度として、エスニック・エンクレイヴが注目される。エスニック・エンクレイヴとは、ある程度空間的に集中し、垂直的かつ水平的に統合した諸企業によるエスニック・ネットワークであり、相対的に自己閉鎖的な経済領域を形成しているものである (Portes 1981: 291, Wilson and Martin 1982: 135, 138)<sup>(9)</sup>。垂直的統合とは、商品の供給や販売の促進等を統制するために、諸産業間で生じる統合であり、水平的統合とは、生産や価格戦略の協調関係を獲得するために、一産業内で生じる統合である (Wilson and Martin 1982: 137)。エスニック・エンクレイヴの自己閉鎖性は、主に資本と労働力調達がエンクレイヴ内部で行われるという点に求められる。特に、継続的にやってくる移民たちを新たな労働力として雇用し続けることで、エンクレイヴを構成する企業等のエスニックな組織は設立・維持され、エンクレイヴは自己閉鎖的に存続しているのである (Olzak 1992: 40, Portes and Bach 1984, Wilson and Portes 1980)。一方で販売活動に関しては、エンクレイヴはその外とつながりを持っている。というのは、エンクレイヴの経済的繁栄は、エンクレイヴ外にどれだけの顧客が確保できるかにかかっているからである (Olzak 1992: 40)。

エスニック・エンクレイヴはマイノリティ上層移動の条件を満たしてくれるのである。第3点めのマッチング問題は、エスニック・エンクレイヴ内に雇用される場としてのエスニック企業が用意されることで緩和される。エスニック企業は、当該エスニック・マイノリティを「差別」なく雇用することが期待されるからである。

第2点めの物的資本に関しても、エスニック・エンクレイヴ内には金融業も存在し、かなり大規模な資金調達が可能である。第1点めの人的資本の蓄積は、エンクレイヴ内の職業訓練システムで可能になる。職業訓練システムは職業・技術獲得の情報をマイノリティに対して容易に入手可能にし、雇用主と労働者との技術訓練に関するリスクを減らす効果がある<sup>(10)</sup>。合州国フロリダ州マイアミに多く居住するキューバ人の例で見ると、1980年に合州国へ渡ってきたキューバ系移民は、1986年現在総数400人の内44.9%がキューバ系企業に雇用され、28.2%が自営業を営んでいる。1973年に渡ってきた移民で1979年現在家族所得が5万ドルを超えた人々は2.1%いる (Portes and Zhou 1992: 505)。1979年現在の調査によれば、専門職と管理職は18%にのぼる (Jensen and Portes 1992: 412)<sup>(11)</sup>。

エスニック・エンクレイヴはデュアリズムへの「収斂」を否定的にする。かなり困難でありながらも、条件が揃えばマイノリティの上層への移動が可能であることを示すからである。一方で、エスニック・エンクレイヴに関して論争が行われている。例えば、エスニック・エンクレイヴの調査研究において、エスニック・マイノリティを特定地域に居住した住民と考えるべきか特定地域に仕事場を持つ労働者とするべきか、エンクレイヴはマイノリティにとって生き残りの手段か上昇の手段か、エンクレイヴは実際にマイノリティ労働者に利益を与えているのか、自営業を始めるために人的資本に比較して結婚上の地位等の属性が大きな役割を果たしているのではないかなどについて意見が分かれている (Portes and Jensen 1987, 1989, 1992, Jensen and Portes 1992, Sanders and Nee 1987, 1992)。しかしエスニック・エンクレイヴが、「マイノリティ労働力のデュアリズム的仮説」に対抗する

論理と事例を示してくれていることには変わりがない。

## 5. 結論と課題

いくつかの変数に注目して、マイノリティの職業階層上昇移動の可能性を考えてきた。中層への上昇のためには、少なくともエスニック・ネットワークが供給する物的資源と逗留から得られる強い経済的動機が必要である。また、エスニック・ネットワークがマイノリティを雇用する企業を設立し、物的資源を供給すると共に、マイノリティに人的資源を身につけさせる職業訓練システムを用意することで、「専門・管理仕事口」等の上層の職業につくことを可能とするのである。合州国の事例から導出した論理のレベルからは、先進諸国がデュアリズムへと「収斂」していくわけではないと結論づけられる。移民労働力の流入が、すなわち経済的なデュアリズムの形成・維持とはならないからである。

しかし残された課題もある。

第1に、エスニック・マイノリティの職業移動に影響を与える変数の内、本稿で焦点を合わせなかったものをも考慮しなくてはならない。マイノリティの側の要因としては、例えば、滞在年数、正規の教育年数、ジェンダー等が考慮すべき変数である。また制度的には、政府の移民政策や1国レベルの労働市場が選別的なのか普遍的なのかによってもマイノリティの職業移動は左右されるであろう。そこで分析の鍵は、これらの諸変数がマイノリティの経済的動機やエスニック・ネットワークがもたらす様々な便益とどのように関連していくかなのである<sup>(12)</sup>。

第2に、本稿の議論は合州国の特殊事情に左右されていないかという疑問がある。例えば、

「移民国家」としての成り立ち、地理的位置、リベラリズムという相互行為原理等は合州国の特殊な要因である。本稿では、エスニシティ研究の観点からデュアリズムへの「収斂」モデルを否定する論理を、合州国における事例から導出した。しかし、合州国を含むいくつかの先進諸国間の比較分析を通じて、特殊事例云々の疑問を払拭し、さらなる理論的補強を行うことが望まれる。

しかしいずれにしても、以下のことは言えるであろう。1970年代半ばまでの先進諸国は、「多元主義的インダストリアリズム」という「行き着く先」へ「収斂」せず、コーポラティズムとデュアリズムへと「拡散」していると言われていた。1990年代半ばの現在、確かに「多元主義的インダストリアリズム」へ「収斂」することはないであろう。しかし一方で、移民労働力に関する限り、デュアリズムへと「収斂」していくシナリオも論理的には容認されないものである。

#### 註

- (1) 「多元主義的インダストリアリズム」に関する最も有力な議論として、Kerr (1983) を参照。また、インダストリアリズムの再検討については山田 (1994) を参照。本稿で使用される「収斂」「拡散」の概念は Kerr (1983) および Goldthorpe (1984) を踏まえている。また、「混沌」という概念は本稿独自のものである。
- (2) 経済的デュアリズム論に関しては様々な議論がある。例えば、体系的モデルがないであるとか、経済セクターのデュアリズムと労働市場のデュアリズムとの関係及びメカニズムが不明確である、といった批判がある (Hodson and Kaufman 1982)。本稿ではデュアリズム論自体の是非の検討に立ち

入ることはしない。労働市場的デュアリズムに議論を限定した結果、上記のような理論的批判を回避することができる。

また、戦後日本の職業移動とデュアリズムの関係を扱った実証研究としては、盛山・都築・佐藤・中村 (1990) を参照。

- (3) 分割労働市場概念は Bonacich (1972, 1976) に依拠している。しかし、Bonacich自身は、1930年代、40年代合州国の黒人労働力と白人労働力に注目し、エスニックな敵対行動 (antagonism) の現出の理由を分割労働市場に求めているのである。すなわち、同一職種でありながら労働に対する報酬に差異があるとき、両者間にコンフリクトが生じるという。分割労働市場を説明要因としエスニックな敵対行動を被説明要因としているのである。一方で本稿では、分割労働市場を被説明要因としたとき、何が説明要因となりうるかを探求している。この点で Bonacich と本稿の立場は異なる。
- (4) ごく最近でさえ、合州国において知能指数 (IQ) と人種 (race) との関係を「立証」したとの主張に対して議論が起こっている。『ニューズウィーク日本語版』(1994) を参照。
- (5) 厳密な議論をするためには、職業階層構造と職業移動との関係を明確にしておくはならない。1) 職業階層構造が予め「中間の仕事口」を含む3層構造を呈しており、マイノリティは中層へと上昇移動するのか。2) そもそも職業階層構造はデュアリズム的な2層構造であり、マイノリティが「中間の仕事口」を新たに形成するという意味で上昇移動するのか。両者は別個の事態である。社会階層論という構造移動と純粋移動の問題とも深く関連している。しかし、本稿の内部で処理するには問題が大きすぎる。したがって、以下の論述では中層が既に存在する場合と中層が新たに形成される場合の両者を、区別せず分析対象にしておくことにしよう。

- (6) 中間者マイノリティ概念を用いたBonacich (1973) は、合州国のマイノリティ以外に、ヨーロッパのユダヤ人、東南アジアの中国人、東アフリカのアジア人、トルコのアルメニア人、西アフリカのシリア人等の状況を同様のものとして記述した。
- (7) Bonacich (1973: 584) も逗留の2形態を区別しているけれども、「一時的逗留」と「永住的逗留」という概念化は本稿独自のものである。
- (8) ここでも職業階層構造と職業移動の関係の問題が現れてくる。厳密に考えると、1) 既存の職業階層構造における上層の仕事口にマイノリティがつく場合と、2) 自営業の経営者が規模を拡大して、その結果上層の仕事口が増える場合は区別されるべきである。しかし本稿では区別せず分析対象にしておく。
- (9) エスニック・ネットワークとエスニック・エンクレーヴの差異をそれらの構成単位に注目して考えるならば、前者の構成単位は仲間集団の個々人であり、後者のそれは企業である。
- (10) BaileyとWaldinger (1991) は、エンクレーヴ効果(enclave effect)として訓練システムの移民に対する影響を強調している。
- (11) イスラエルのアラブ人についても、類似したエンクレーヴ効果が報告されている。アラブ人にとって、ユダヤ人コミュニティ(複エスニック労働市場)で働くよりもアラブ人コミュニティ(単一エスニック労働市場)で働く方が「差別」から保護されて、結果的に有利になるとされる(Semyonov 1988)。
- (12) エスニック・ネットワークから離脱したが「ゆえに」経済的な上昇移動を達成できたとする論理や事例もありうるであろう。ネットワーク離脱論が示す事例では、上昇移動は達成できてもアイデンティティ・クライシス等の存在論的不安感に苛まれる場合がある。ホスト社会の上に「文化的軟着陸」を果たすためにもエスニック・ネットワークの役割が重要であることが示唆される。文化と経済活動の「矛盾」という極めて社会的な問題は、エスニック階層論の次段階の課題であろう。

#### 【参考文献】

- Anderson, Benedict 1992 The New World Disorder, *New Left Review* 193: 3-13. = 1993 関根政美訳「〈遠隔地ナショナルリズム〉の出現」『世界』586: 179-90.
- Bailey, Thomas and Roger Waldinger 1991 Primary, Secondary, and Enclave Labor Markets: A Training Systems Approach, *American Sociological Review* 59: 432-45.
- Berger, Suzanne and Michael J. Piore 1980 *Dualism and Discontinuity in Industrial Societies*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bonacich, Edna 1972 A Theory of Ethnic Antagonism: The Split Labor Market, *American Sociological Review* 37: 547-59.
- 1973 A Theory of Middleman Minorities, *American Sociological Review* 38: 583-94.
- 1976 Advanced Capitalism and Black/White Race Relations in the United States: A Split Labor Market Interpretation, *American Sociological Review* 41: 34-51.
- Dore, R.P. 1973 *British Factory - Japanese Factory: The Origins of National Diversity in Industrial Relations*, London: George Allen & Unwin. = 1987 山之内靖・永易浩一訳『イギリスの工場・日本の工場』筑摩書房.
- 1983 Goodwill and the Spirit of Market Capitalism, *British Journal of Sociology* 34(4).
- Geertz, Clifford 1978 The Bazaar Economy: Information and Search in Peasant Marketing, *The American Economic Review*

68(2).

- Goldthorpe, John (ed.) 1984 *Order and Conflict in Contemporary Capitalism*, Oxford: Oxford University Press. = 1987 稲上毅・下平好博・武川正吾・平岡公一訳『収斂の終焉——現代西欧社会のコーポラティズムとデュアリズム』有信堂.
- Hechter, Michael 1975 *Internal Colonialism: The Celtic Fringe in British National Development, 1536-1966*, Berkeley: University of California Press.
- Hodson, Randy and Robert L. Kaufman 1982 Economic Dualism: A Critical Review, *American Sociological Review* 47:727-39.
- 稲上毅 1989『転換期の労働世界』有信堂.
- 稲上毅・H. ウィッターカー・逢見直人・篠田徹・下平好博・辻中豊 1994『ネオ・コーポラティズムの国際比較——新しい政治経済モデルの探索』日本労働研究機構.
- Jensen, Jeif and Alejandro Portes 1992 Disproving the Enclave Hypothesis, *American Sociological Review* 57: 418-20.
- Kerr, Clark 1983 *The Future of Industrial Societies*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. = 1984 嘉治元郎訳『産業社会のゆくえ——収斂か拡散か』東京大学出版会.
- Lewis, Oscar 1959 *Five families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty*, New York: Basic Books Inc. = 1970 高山智博訳『貧困の文化——五つの家族』新潮社.
- 『ニューズウィーク日本語版』1994 (1994年 11月 2日号) TBS プリタニカ.
- 尾高煌之助 1989 「二重構造」中村隆英・尾高煌之助編『日本経済史6 二重経済』岩波書店: 133-84.
- Olzak, Suzan 1992 *The Dynamics of Ethnic Competition and Conflict*, Stanford: Stanford University Press.
- 大塚友美 1993 「国際労働移動の政治社会学」税務経理協会.
- Portes, Alejandro and Jeif Jensen 1987 What's an Ethnic Enclave?: The Case for Conceptual Clarity, *American Sociological Review* 52: 768-73.
- 1989 The Enclave and the Entrants: Patterns of Ethnic Enterprise in Miami before and After Mariel, *American Sociological Review* 54: 929-49.
- 1992 Comments and Replies: The Enclave and the Entrants: Patterns of Ethnic Enterprise in Miami before and After Mariel, *American Sociological Review* 57:411-14.
- Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut 1990 *Immigrant America: A Portrait*, Berkeley: University of California Press.
- Portes, Alejandro and Min Zhou 1992 Gaining the Upper hand: Economic Mobility among Immigrant and Domestic Minorities, *Ethnic and Racial Studies*, 15(4):491-522.
- Sanders, Jimmy M. and Victor Nee 1987 Limits of Ethnic Solidarity in the Enclave Economy, *American Sociological Review* 52:745-73.
- 1992 Problems in Resolving the Enclave Economy Debate, *American Sociological Review* 57:415-8.
- Sassen, Saskia 1988 *The Mobility of Labor and Capital: A Study in International Investment and Labor Flow*, Cambridge: Cambridge University Press. = 1992 森田桐郎他訳『労働と資本の国際移動——世界都市と移民労働者』岩波書店.
- 盛山和夫・都築一治・佐藤嘉倫・中村隆 1990 「職歴移動の構造——労働市場の構造とキャリアパターン」直井

- 優・盛山和夫編『現代日本の階層構造 1 社会階層の構造と過程』東京大学出版会: 83-108.
- Semyonov, Moshe 1988 Bi-ethnic Labor Markets, Mono-ethnic Labor Markets, and Socioeconomic Inequality, *American Sociological Review* 53: 256-66.
- 式部 信 1992 「『外国人労働者問題』と労働市場理論」伊豫谷登士翁・梶田孝道編『外国人労働者論——現状から理論へ』弘文堂: 137-68.
- Solomons, John 1986 Varieties of Marxist Conceptions of 'Race', Class and the State: A Critical Analysis, John Rex and David Mason (eds.) *Theories of Race and Ethnic Relations*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 堤 要 1993 「アメリカにおけるエスニシティ理論」『社会学評論』174: 77-87.
- U.S. Bureau of the Census 1992 *Current Population Reports*, Washington: Brookings Institution, series p-60, No.180.
- Wilson, Kenneth L. and Alejandro Portes 1980 Immigrant Enclaves: An Analysis of the Labor Market Experience of Cuban in Miami, *American Journal of Sociology* 86: 295-319.
- Wright, E.O. 1985 *Classes*, Verso.
- 山田信行 1994 「労使関係と社会変動——ネオ・インダストリアルリズム論の提唱」『年報社会学論集』7 関東社会学会: 109-118.
- 山本 泰 1993 「マイノリティと社会の再生産」『社会学評論』175: 20-39.

(たるとも ひでき)

電話03(5684)0751  
FAX03(5684)0753  
〒100 東京都千代田区本郷5-2-10  
出版書御茶の水書房

- 国際社会における在日外国人など社会の変化を分析  
**変わりゆく社会と社会学——21世紀への展望**  
二宮哲雄・戸谷 修編著 A5判・210頁・2472円  
脱工業化・情報化など激動する社会と家族や人間関係を多面的に究明し、ポスト大衆社会の行方に向ける
- 伝統的都市「金沢」における住民生活  
**金沢——伝統・再生・アメニティー——**  
二宮哲雄編著 菊判・510頁・8446円  
伝統と個性を生かした地方都市「金沢」を行政・歴史的環境・社会階層・工芸・宗教・言葉等で総合分析
- 都市生活における町内会の機能  
**町内会の研究——「住縁アソシエーション」としての町内会——**  
岩崎信彦・鏝坂学・上田惟一・高木正朗・広原盛明・吉原直樹編 A5判・450頁・6895円  
都市行政における「町内会」の機能とコミュニティ政策展開下の役割を京都・神戸など全国的視野で分析
- 日本学士院賞受賞!!  
**ジンメル社会学の方法**  
阿閉吉男著 A5判・380頁・6180円  
同時代の社会学者らの所説との比較検討を通してジンメルの小集団理論、支配理論、闘争理論などを究明
- 宗教的世界、芸術的世界の社会学的分析  
**ジンメルとウェーバー**  
阿閉吉男著 A5判・410頁・6386円  
ジンメルの方法的相対主義、ウェーバーの方法的個人主義、デュルケムの方法的合理主義を比較検討
- マイノリティに関する新世界ガイド  
**エスニック問題と国際社会**  
R・スタヴェンハーゲン/加藤一夫監訳 A5判・330頁・3914円  
国連大学プロジェクトで行われたエスニック・マイノリティ、社会開発、人間開発に関する比較研究
- エスニシティ、多文化主義、先住民問題!!  
**歴史の転換と民族問題——ナショナリズム・ルネサンスの時代**  
加藤一夫著 A5変・410頁・3296円  
冷戦終結後の歴史状況の中で、21世紀の新しい文明を目指す“民族の時代”の胎動を整理・検証する
- 国家の成否を問う民族の流れ  
**多民族社会の到来——国境の論理を問う外国人労働者**  
岡部一明著 A5変・320頁・2884円  
先進諸国3千万人の外国人労働者の存在と、多民族共生を目指す世界の新秩序の形成を展望する